

望んでいる事柄を確信し

2021 年 9 月 18 日

学院長・宗教総主事 嶋田 順好

聖書：コリントの信徒への手紙 II 12 章 9 節

⁹すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

.....

聖書：ヘブライへの手紙 11 章 1 節

¹信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。

人は大海原を前にした時、何を思うのでしょうか。だれもが歌ったことのある文部省唱歌には「海」と題した二つの歌があります。一つは「海は広いな、大きいな、月は昇るし日は沈む」と海を歌い、もう一つは「松原遠く、消ゆるところ、白帆の影は浮かぶ。干網浜に高くして、かもめは低く波に飛ぶ。見よ、昼の海。見よ、昼の海」と海を歌います。いずれも長閑で平和な光景が歌われるのです。

あるいは私たちが、横浜や神戸の波止場にたたずんで、どこからともなく聞こえてくる行き交う船のボーッと響く汽笛に耳を澄ませたとしたら、わけもなくノスタルジックな思いにとらえられるのではないのでしょうか。

しかし、今から 2500 年以上も前の旧約聖書の民が大海原を前にして抱いた思いは、まずもって戦慄にも似た恐れでした。海、それは時としてしぶきをまきあげながら波が逆巻き、荒れ狂い、人間の命を呑みこむ恐ろしい世界、人間の力では到底歯が立たない混沌の海獣リヴァイアサンが住みつく世界と映っていたのです。

1620 年 9 月 6 日、プリマス港を出港したメイ・フラワー号は、波荒い大西洋を横断して新大陸に渡っていきました。ピルグリム・ファーザーズの旅は、今でもアメリカ人の精神を鼓舞してやまない建国物語です。しかし、その旅路には多くの犠牲が伴いました。彼らは 2 ヶ月後の 11 月初旬には新大陸沿岸に到着し

ながら、上陸地点を発見するまでに1ヶ月以上を費やしてしまうのです。ようやく彼らが上陸できたのは、すでに冬が始まりかけた12月6日になってからのことでした。十分な準備も、食料も、家もないまま、ニュー・イングランドの凍てつく大地で、冬を越すことは困難を極めました。嵐に吞まれることはありませんでしたが、メイ・フラワー号の乗船者の半数が、最初の一冬の間、病死したのです。人間的な評価からすれば、約束の地、乳と蜜の流れる地を目指した旅路にしては、惨憺たる結果としか言いようがありません。しかし、だからといって、彼らは出てきた土地のことを思って、こんなことならさっさと故郷に戻ろうとはしなかったのです。

ピルグリム・ファーザーズから下ること266年。宮城学院の源頭にたたずむ2人の女性、31歳のエリザベス・E・プールボー宣教師と22歳のメアリー・B・オールド宣教師たちは、大西洋ではなく、太平洋をわたって日本の、仙台の地に立ちました。

彼女たちが故国を発つとき、大海原を前にして一体何を思ったのでしょうか。もちろん、福音を宣べ伝える喜び、神に仕える幸い、東洋の少女たちと出会えることへの期待を持っていたことでしょう。それと同時に、また一人のいと小さき人間として、様々な恐れやおののきや不安に囚われずにはいられなかったことも確かなことではないでしょうか。しかし、彼女らもまた、ピルグリム・ファーザーズの信仰に倣って、さらにはエジプト脱出を導いたモーセに倣って、故郷をあとにし海にこぎ出したのです。

事実、1886年6月1日、ペンシルバニア州ハリスバーグのセーラム・リフォームド教会で送別礼拝が持たれた時、プールボー宣教師は次のような言葉を語っています。

「私たちは今、人生の新たな一歩を踏み出そうとしております。身を置くことになるその環境は、これまで私たちが慣れ親しんできたものとは全く異なるものとなるでしょう。生まれ故郷や友人たちから遠く離れ、献身と大きな倫理的責任を伴う、数々の試練と挫折の生活でもありましょう。しかし、もしその任務が、信仰をもって、誠実に、たゆむことなく遂行されるならば、言葉では到底言い表すことのできない、平安と喜びと幸いに満ち溢れた人生ともなりましょう。」

想像力の翼を羽ばたかせ、自らが129年前のセーラム・リフォームド教会の

説教壇に立つプールボー宣教師と一体となってこの文章を声に出して読むとき、不思議にも心が熱くなるのを禁じえません。とりわけ「献身と大きな倫理的責任を伴う」と語るところで、深く自らのあり方を問われる思いを抱かされるのです。「自分は、宮城学院のためにこの身を献げているだろうか」「教師として、職員として宮城学院に連なる大きな倫理的責任を自覚しているだろうか」と。

ここでプールボー宣教師は、明確に自分たちの歩みが「数々の試練と挫折の生活」となることを予期しながらも、「もしその任務が、信仰をもって、誠実に、たゆむことなく遂行されるならば、言葉では到底言い表すことのできない、平安と喜びと幸いに満ち溢れた人生ともなりましょう。」と言い切るのです。

この挨拶の中で先生は、自らが女性宣教師として立たされることになった直接的な契機について短く次のように語っています。

「日本の女性のために、その生涯を捧げる女性を教会が求めていることを知った時、直ちにそれが私自身に向けられたものと受けとめました。」

大いなる決断を語るにしてはあまりに単純かつ素朴な言葉です。ここで「直ちに」と語られていますが、「召命」、すなわち神から使命を与えられるということは、熟慮に熟慮を重ねて決断されるというよりも、突然、にわかにより一方的に開かれ、示され与えられるものなのかもしれません。もちろん、その決断を与えられた後に、プールボー宣教師は、自らがその任にふさわしいか否かを吟味するべく一人静まって祈りの時を持ち続けたことでした。しかし、そこでも「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」との御言葉に励まされて、最初に与えられた志を貫くのです。それはまことに大胆且つ冒険的な生き方と言えるのではないのでしょうか。

英語の *adventure* という言葉は、教会暦のアドヴェントととも密接に関連する言葉で、ラテン語の *venire* に、「何々に向かって」という意味を持つ前置詞 *ad* が、接頭辞としてくっついてできた言葉ですが、基本的には予期せぬ形で到来したものを真摯に受けとめ、その身を賭すという生き方を指していると言えるでしょう。

キリスト者でパスカルやデカルトの研究者であった森有正は、「真の冒険とは、何も北極探検とか南極探検だけではない。新しいものに触れて、自分もま

た新しくされていく、そういう中に踏み込んでいくこと、そういう生き方が冒険だ」と語りました。自分の回りで起こったことをそのまま引き受けずに、その中で自分の欲望、あるいは自分の判断に適合したものだけをとって、自分のものにして、あとを捨てる。つまり、自分に都合の良いものだけを取り入れ、都合に合わないものは排除してしまう、そういう自分中心で、自分を変えようとしなない生き方は、冒険の反対だということです。プールボー宣教師は、まさしく神の召しに従い、アメリカの少女のための教師から、日本の少女のための教師となる道を選択し、自らの方向転換をはかったのです。

つまり冒険とは、思いがけない出来事によって、特に神が備えてくださる思いがけない出会いや出来事や考えや試練によって、自分の外にだけでなく、自分の中に新しいものが生まれてくること。それが生き生きとした人生と人格を形作るということです。この時、プールボー宣教師がなしたことは、まさに森有正が言うところの「冒険」でした。それはまたヘブライ人への手紙の記者の言い方に従えば、「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することである」ということ以外の何ものでもありません。

送別礼拝のあとのプールボー宣教師の旅路を追ってみたいと思います。

2日後の6月3日、キリスト昇天日の午前7時45分に先生はセーラムを出発。広大なアメリカ大陸を東から西へと横断すべく、ひたすら大陸鉄道で走りぬけ、1週間後の10日午前11時10分にサンフランシスコに到着しています。旅の疲れを癒す暇もなく12日の午前2時にはシティ・オブ・シドニー号に乗船、船酔いに苦しめられ続けた「長い陰鬱な」20日間の航海に耐え、7月2日に横浜港に到着、文字通りまるまる1ヶ月間の長旅を経て、日本にたどり着いたのです。

早速、プールボー宣教師は同僚のオールト先生と共に、すでに着任していたグリング宣教師、モール宣教師に助けられつつ、フェリス英和女学校をはじめとする横浜や築地の居留地に建てられたミッション・スクールを精力的に視察しています。この調査を通し、すでに東京、横浜には先行した宣教団体によって、多くの女子のためのミッション・スクールが運営されており、自分たちが意義ある働きをする可能性が少ないことを見抜くのです。途方に暮れるような思いを抱く中、この時モール宣教師を通し、2人は福沢諭吉が創設を構想していた女学校の教師となる道を奨められています。もし、この時、その道が選ばれていたら、今日の宮城学院はなかったのです。しかし、もちろん2人は存分にキリ

スト教教育を全うできる女子のためのミッション・スクールを創設するヴィジョンと使命においてぶれることはありませんでした。

そのころ奇しくも一足先に仙台で押川方義牧師と共に仙台神学校を立ち上げたウィリアム・E・ホーイ宣教師から、仙台では女学校の創設が非常に強く期待されているとの報告が届きます。二人は迷わず東北の地でキリスト教に基づく女学校を創設するという厳しくも光栄に満ちた使命に応えることを決意するのです。

当時は仙台まで鉄道が通っていなかったため、旅路には再び船が用いられました。乗船日時は分かりませんが、荻の浜港、塩釜港を経て、7月16日午後11時30分に「手に手に提灯を持って仙台市郊外の利府まで出迎えていた多数の教会員に暖かく歓迎されながら仙台に着いた」と報告されています。つまり、極めて重要なこれら一切の決断が、日本に足を踏み入れてから、わずか10日程度のうちに果されたのです。そしてほぼ2ヶ月後の9月18日には宮城女学校の開校式が持たれ、9月24日には10名の生徒をもって授業が始められたのです。もちろん、押川牧師、ホーイ宣教師、多くの心あるキリスト者の支援があったとはいえ、これら一切のことが、言語も、文化も、風土も異なり、なおキリスト教には極めて警戒的な未知の地で果されたことを思うと、驚くべき電光石火の早業と言わずにはられません。

開校までの2ヶ月間の折衝の経過をみると、ここにも試練があったことが偲ばれます。特に日本側は、押川牧師を校長にするよう強く望んでいたことがわかります。この時、押川牧師は35歳、プールボー宣教師は31歳。「長幼の序」と共に、男尊女卑の傾向が圧倒的に強かった当時の時代状況を鑑みると、日本人キリスト者からすればプールボー宣教師が押川牧師に校長職を譲るのは当然とみなされたことでしょう。しかし、ここでも先生は妥協することはありませんでした。

的確に状況を見極める洞察力、速やかに事をなす決断力、どんな時にもぶれない志を貫きつつ、これら一切の事を果たしたプールボー宣教師の働きがあればこそ、今日の宮城学院があるのです。その望みは、未だ人格としては十分に尊重されていなかった日本の女性のために、その生涯を捧げる女性となるということでした。文字通りそれは「望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認する」冒険的生であったと言えるのではないのでしょうか。

初代校長プールボー宣教師の写真が学院長室にはあります。美しい女性です。現代風に髪型や装いをアレンジすれば、女優やファッションモデルにもなれるのではないかと思わされるほどです。しかしただ単に容姿が美しいということだけではなく、一点を見つめる強い眼差し、すっきりとした鼻梁、きりと結ばれた唇から、人間的には到底手に負えないと思われる使命(ミッション インプossible)に果敢に挑戦し続け、真の意味の冒険を果たす女性のみが湛えることができる凜とした美しさが伝わってくるのを感じざるをえません。

昨年から引き続き Covid-19 の試練にさらされる中、創立 135 周年の記念日を宮城学院は迎えました。私たちの目の前に何が広がっているでしょうか。確かなことは大海原が広がっているということです。その海原は、うらかな陽光がさし注ぎ、労せずして大漁を約束してくれる、のどかな海ではありません。ちょうどこの日、台風の風雨にさらされているように、突風が吹き荒れ、十重二十重に波が押し寄せる海原に違いないのです。だからこそ、プールボー先生やオールト先生の志を継承する者として、その試練から身を避け、自らを安全地帯に置き、漫然と座り込んだまま、ひたすら嵐が過ぎ去るのを首をすぼめて待ち受けようとする者であってはなりません。主が導き、主が共にいてくださることに信頼し、常に御言葉によって自らを変革しつつ、嵐の状況を的確に見極める知恵と洞察を働かせ、巧みに嵐を回避しながら、愛と望みをもって荒海を漕ぎ渡る冒険的な歩みをなす者であろうではありませんか。なぜなら「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認すること」なのですから。それこそが、今、この時、この墓前に立つ、宮城学院の教員、職員である私たちに求められている冒険的生に違いないからです。

祈祷

主なる神、創立 135 周年を覚えるこの日、墓前礼拝を持たしめられましたことを心より感謝申し上げます。私たちは「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」との御言葉に信頼し、自らを安全地帯に置き、漫然と座り込んだまま、ひたすら嵐が過ぎ去るのを待ち続けるあり方から解き放ってください。あなたのみもとに召された多くの宣教師、諸先輩に倣い、主が導き、主が共にいてくださることに信頼し、常に御言葉によって自らを変革しつつ、嵐の状況を的確に見極め、巧みに嵐を回避しつつ、愛と望みをもって荒海を漕ぎ渡る者とならせてください。宮城学院のまことの創立者である主イエス・キリストの御名によってお願いいたします。アーメン

祝禱

「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」との御言葉を心に刻み、平和のうちにこの世へと出ていきなさい。

主なる神を愛し、隣人に仕え、主なる神に仕え、隣人を愛しなさい。

願わくは主があなたがたを祝福し、あなたがたを守られるように。

願わくは主が御顔を向けてあなたがたを照らし、あなたがたに恵みを与えられるように。

願わくは主が御顔をあなたがたに向けて、あなたがたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、宮城学院を愛し仕え、ここに集いし者たちに上に、召されてみもとにある宣教師、諸先輩方の上に、宮城学院に連なるすべての者たちの上に、今も、後も、とこしなえにあらんことを。アーメン